祭 REDISCOVERY

いくたま夏祭り〈大阪市（大阪府）〉

毎年7月11日、12日に行なわれる、大阪市天王寺区の生國魂神社（いくくにたまじんじゃ）。地元では「いくたまさん」の愛称で親しまれています。神武天皇東征に際しみずから石山碕（現在の大阪城を含む一帯）に日本国土の御神霊、すなわち八十島神である生島大神・足島大神を祀られ、国土平安を祈請されたことに始まる大阪で最も古いとされる日本総鎮守の神社です。八十島祭に代表される宮中祭祀の神社として、延喜の御代には難波大社とも尊称されていました。天正13年（1585年）豊臣秀吉の大阪城築城により、現在地に遷ったと伝えられています。昭和初期に「陸の生國魂、川の天神」と呼ばれ、生國魂神社の夏祭りは、大阪天満宮の天神祭と並び称さました。特に豊臣秀吉から与えられたと伝わる「枕太鼓」を先頭に獅子舞などが練り歩く「渡御行列」は、戦前には約2000人が参加するにぎやかさだったそうです。神事は戦時中に途絶えましたが、地域の住民が立ち上がり一から再興、地域の祭りとして、その伝統を再び受け継ぎ、1990年に再開し、現在に至ります。ただし、交通事情などを反映して、ご神体をトラックに載せて大阪城まで運ばざるを得なかったのです。

祭は11日「宵宮」、12日「本宮」の2日間にわたって行われます。その最大の見どころは、12日に厄病退数を願い、大阪城へ渡御する「枕太鼓」「獅子舞」「金銀神輿」の「おねり」です。渡御の中でも、先頭を行くのが枕太鼓です。前後左右に太鼓台が揺さぶられる中、願人（がんじ）と呼ばれる男衆が激しく太鼓を打ち鳴らす枕太鼓。願人の背もたれが大きな枕に似ているところからそう呼ばれています。太鼓を叩くことには、邪気を払う意味があります。願人の装いは「晴着」と呼ばれ、赤い頭巾をかぶり、瓢箪模様の法被を着ていますが、これは「忍び」の姿が起源と言われています。子どもとは思えない見事な所作で舞われるのが特徴です。邪気を払うといわれる獅子舞、小さい子どもから中学生まで、揃いの法被を着た子ども達が練り歩く姿は、とても愛らしく、見る人々を和ませます。そして美しく飾られた「金銀神輿」境内をところせましと走り回るその姿は、男の荒々しさを見せてくれます。また、この神輿に華を添えるのが「子供太鼓」。その愛らしい姿は、枕太鼓とは違い、繊細で風情のある独特のリズムを奏でます。生國魂神社から谷町筋を大阪城に向かって「枕太鼓」の雄壮さ、「獅子舞」の愛らしさ、「金銀神輿」のきらびやかさ、これが三位一体となって祭りを盛り上げます。

伊根祭〈伊根町（京都府）〉

京都北部、丹後半島の北端に位置する『舟屋の郷』伊根町。伊根祭は、江戸時代から始まったと伝えられる300年以上続く祭です。約400年前、伊根の八坂神社の氏子が京都の八坂神社から牛頭天王を勧請したのが起源とされ、大漁、海上安全、五穀豊穣が祈願されます。現在では伊根町の夏の風物詩となっていて、毎年多くの人で賑わいます。

参加者確保のため開催を毎年7月下旬の2日間（伝統的には7月27日、28日）に変更した祭は、通常行なわれる「例祭」と、大漁の年にだけ行なわれる「大祭」の2種類があります。「大祭」でのみ出される4艘の船屋台が、京都の祇園祭の山鉾が海に浮いているように見えることから、「海の祇園祭」と言われています。伊根祭は大きく3つの地区から構成され、その歴史は古く、1761年（宝暦11年）、伊根湾内で長さ14尋の鯨が捕れ、その収益により、銀7貫500目をもって船屋台が作られたと伝えられています。「ともぶと」と呼ばれる和船7艘を横に合わせて土台にし、その上に釘を一切使わないで屋台が組立てられます。建造物として釘を使わない組み立てはたいへん珍しく、屋根となる部分の色や、見送りの柄など地区ごとに様々です。船屋台の上は舞台となり、歌舞伎や三番叟などが上演されます。船屋台には1艘につき1艘の「化粧船」と呼ばれる船がつきます。化粧船は伝馬船を擬装したもので、船屋台で上演される歌舞伎などに出演する役者らが着替えたり、化粧を施すための船として用いられています。「八坂神社祭礼船屋台行事」の名称で京都府登録無形民俗文化財に指定されています。

文:ODA広報委員会　イラスト:大和田　昌